

30

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0

亮
や
七
き
ち

武
12
年
表

二
一

正月

リ 5
112
3



武江年表卷之三

延寶元年癸巳

九月廿一日改元

年號弘福寺冥釗

延山後年
釋師あり

翌年正月立塔造宮廟

○

同攻會印

舊麥始○九月十七日後發九代稻季率七十才

○十月廿二日連寧歸里村玄祥率○十一月廿八金地院立山十刹佛

山惠福寺舍一堂○十一月廿九榜上寺大禪院

谷師常時
主事清了之

○十一月廿日序桐石碑庚午

六十九方号宗園石碑源葉乃元祖
あり紫脫子林房小葉ノ以

○効ニ而其居處大名額定天王推立を上事續狂云を與行以

元祖四十年
十四年

初華泰教主肇
始て荒すとあり

同二年甲寅

門號卷
三
113

二月濱革大田ち十五畳再建○二月廿六日夜宿を手計の裏雲
あらうあ(被引空布楊を没ひらる)

○八月あ久保八幡宮内門の鐘せ之切多(引差招板をもつ持と
廻る)○乃翁修教白金陽雲ちふ經軍を遠説典を假一萬銀を
を取む○玉くはれ○松尾東方今年難勢して夙夜忙
溝川を店を旅ひて近ノ芭蕉一株を裁(世人芭蕉)

○十月七日持杖探幽法乍卒七十ニカニ田大寺モ小墓碑あり
なきの内達也一而そり

○同廿四日三公等晦堂卒久立ま能也ナリ
幕第自性院寺葬

处室二年 12月間

喜天平胤暉金廩を餐して族氏を賜給す

○二月六日古筆不傳卒○二月廿九令於妙福院入が有る

○宝治四年古筆不傳卒

卒四月五日店と号
筆の所久あり

○九月本挽町山村長を委せし店にて始て乃我續狂名を與行せ
ばぬの名跡(舊聞考證)芳林と之接する所す萬波の船ふ山縣二年まことに町の邊
高の舟の下に立てと傳きまつて時至度万葉村山又左からおひりてお雲のちくふか
男女交りてお家狂名を傳へけりとひて
まつてお家狂名我狂名をあひるを古一

同四年丙辰

七月十四日風雨室東洪ち○九月簇炮海藻地先を室生を美効を
能與行一本半春ともりのものなる夜く雨降○八月十七日儒医附る之行京師
押谷半平名子也号舞野本羽靈事を詳しきの如き云
黑本半平安政の所爐火壁あり一人を囲して烟中入更に火
持く庭木植へ生糞を育てたりの或は傍と一或は傍と不見若吳
あり又た是深か一夕移そ灰燼の中を易て捨ひ覆えりて居を

接てりとの如くと云ふ
以上津土度量
篇の文を畧也

○十一月七日暮六半附吉宗江戸
町ニ丁目より火災にて萬小風烈一々
廓焼亡び此火廓か(燒)燒
て至新中(みうち)の火より起て燒る
は時近中二人燒死及昇殿の後始て燒る
ニ安坐の傍を假宅ひて商賣す

○十二月廿六日江戸大火災あると
一和深合運あらま方城

延宝五年丁巳十二月室

に月八日下岩池のまことに横田七郎左衛門ある事を憂ひ急て難可
翁鬼子母神を祈マリ小其間方木村伊太郎(あらわし)小網町ニ又川手
今日鬼子母神像を感得(んく)ひ後七郎左衛門妻男子を守(まつ)御奉
班像を奉所奉佛(まつ)安寧(やすむ)と○七月仲旬より江戸中町く涌
も(ゆき)英靈(えいりやう)を受(うけ)て清刹林(きよせきりん)あり
宿(しゆく)の一本木延宝己(ご)の年(とし)を
踊(おど)りたり老(おとこ)が踊(おど)りりて
○八月六日大風雨木挽町(きぬまち)を吹(ふぶき)て嘯(うなが)す

○江戸省板引七巻○東朝改元考二冊刊行(せきかひ)

同六年伏牛

河原上人奥澤村澤真(くわいだる)九品佛(くわいだる)冥(めい)墓(ぼ)
他者(ほかもの)○辛(さき)舞(まい)妓(ぎ)居(ゐ)居(ゐ)元(もと)に代(しろ)同(どう)市(いち)村(そん)竹(たけ)之(の)妻(めぐみ)翁(おきな)容(よう)
貌(めう)り老(おとこ)廉(あらわし)あ(あ)りて(て)常(じよ)を惜(うれ)り世(よ)苦(くる)撫(なで)の門(もん)によ(ひ)り今(いま)年(とし)
廿(たそ)九(くじゅう)岁(さい)佐(さ)藤(とう)平(ひら)宣(あきよ)清(きよ)教(きょう)ふ(ふ)て(て)行(ぎよ)法(ほう)師(し)と(と)う(う)想(おも)ひを(を)あ(あ)ざ
ゆ(ゆ)舞(まい)納(まつ)の月(つき)別(べつ)娶(あ)て(て)舞(まい)妻(めぐみ)翁(おきな)を(を)脊(おき)ひ法(ほう)出(だ)す
あ(あ)は(は)は(は)年(とし)所立(しろだて)月(つき)自(じ)性(じゆう)院(いん)を(を)再(さい)興(こう)常(じよ)行(ぎよ)念(ねん)佛(ぼく)を(を)修(しゆ)ま(せ)す
作(さく)の奥(おく)寺(てら)と(と)り(り)享(こう)保(ぼう)三(さん)年(とし)
小(こ)寂(ぢやく)せり○十月六日猪(いのし)狹(せき)右(う)京(きやう)時(じ)行(ぎよ)年(とし)

同七年己未

夏大も大川筋まき生糸いともも

○十一月、二月浪人平井権八昌川正於アシカニ刑せハシメルる。族人の幼ヒトコロ西友季の殺スルを悔後院の長シロを殺スルを組て逃ハシメルりとて同一殿タツイ代と
そふ人あり。おま湯を賣マサニあやマサニの入ふして控ハシメルよう。

○十二月十二日連寄岸里村昌通率ハシメル六十五方

延寛八年 庚申 八月室

正月八日旗木春羽率ハシメル

旗黄坊様次と号ハシメルー大浜の案ハシメルをあつめて源錢を借ハシメルー

亭跡考江戸名案ハシメル

○二月十四日卯申時ハシメルに早時ハシメル近園夜ハシメルのれー○家因幡墨

東師治戸ハシメルて毎帳ハシメル○二月裏地ハシメル色ハシメル破ハシメル御坐再建ハシメル。萬ハシメルを願ハシメル今年四

て二月奉坐ハシメル建立ハシメルあり。也或ハシメルか小元ハシメル又本祭ハシメル又唐足後樂地ハシメルうけりて

又向小寺坐ハシメル建ハシメルる。寶文一年の江戸名案記ハシメル小元ハシメルと主ハシメルは時始ハシメルて建立ハシメルすあり。此

周ハシメル今皆大坂町ハシメルを荒町ハシメルと呼ハシメルる。小者ハシメル頼ハシメルむ檜山町二丁同の本側ハシメル

あり。此檜の花ハシメルを賣ハシメル。が多ハシメルくあり。一ハシメルあゆハシメルく唱ハシメルーともん

○三月初日輪ハシメルあたひハシメル朱ハシメルのどーハシメル○五月林某春羽率ハシメル六十五方

○六月廿九日佛人松江准舟率ハシメル

七十五方ハシメル名宣判ハシメル

佐藤大空堂鑑鑿ハシメル

○八月廿八日せハシメル如來す

立智如意の大佛入弘法堂ハシメルあり

再遣ハシメル

○宜八月六日大風ハシメル深川本前

浜町靈巖游ハシメル波瀬ハシメル丁塔海ハシメル上瀧ハシメルりよてハシメルを捕ハシメル。人溺ハシメル。又少

少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

又少瀧ハシメル。又少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。又少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

又少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

少瀧ハシメル。但未止ハシメルる谷中法華寺ハシメル奉坐ハシメル。奉坐ハシメル。又少瀧ハシメル。

○十月晦日酉ハシメルの刻ハシメル坤ハシメルの方向ハシメル度ハシメルサニヤ服長ハシメルサナ服ハシメル。

自ハシメル来ハシメルりハシメル生根ハシメルの里ハシメルを長空ハシメル坐ハシメルとハシメル。十二月生至ハシメル原ハシメル。

○挂繭於葉集流ハシメル二十三卷

掛年間記事

承代將ハシメルハ幡宮ハシメルに宿ハシメルを置ハシメルまて生序ハシメルの事ハシメル稀ハシメルあり。一月處室ハシメルのこうはどハシメルよハシメル二二町のうち酒牌ハシメル葉亭ハシメルをばくハシメル服ハシメルの女ハシメルを

御へ湯湯の釜底と見一々るとあうけ地を沸やへ築かへる傍
み一の遠くへ序源の駿山近くへ金爐せき浦を眺望へ往來の所
みてわいへとそ此へ处室の役と國子よりて御へむへ は以前西代
あり今之○ あちる記二冊刊行 桃次庵深が活版の
而とぞ

○ あん不先生の後名世從ふ处室二年の編玉町の活版と家業を引
一木活版櫻院無縫金斧山のふ代をせ一木櫻院活版の下

おと一木自山の左方並づくもうち櫻院の焼ふの焼おとあるとうけてうろ一木室幸
を見せぬとすせ 八丁堀の松原せんべの日本橋東へ着する御座うちうれ
色書きをこよへ まんぢう猿町の助二ふのやきとみ玉橋のちらしうせの二官階大弘
太郎墨の源みをゑ解 とある一 あん先生と云處室の役の役の
名ねあひすりと云ふと云く焼の本偶今ふありて商家の軒のとすあり

○ 作形ちと寫へ小さかる魔燭を作りもむ 旗本山岩那耶移の役お家
らうとくやと とせしむ ○ 此以俳諧ふ江戸櫻林風とりふ口調へ因代松意一四友等
とり起りて盛ふ狂想又赤白付とりひみ始りて行を元禄ハ九年の
ころ又江戸より○ 堀町附近にの本當せもとあよもとこうる大女 不よれ
又南裏とりひ小男を見入せあとひ 用達策
不もる

○ 江戸繪圖の处室の圖をみて度へと見ゆ本不深川をかづひへ
實文と处室の写しき始りへあるべ一 处室へ年桜引せり西の内堀大手續巻の
絵を市井場屋根とありえほしきの圓ひをとひをとひ妻へありゆふ寿昌う浦豈う
弓唇是ふ次りをとひとひ役名もとてを近幸引くひとひ意あるべ一 烟筋人多知れ
實文のひすり室水のころとひやう櫻のりのありてうらへうら
一五十九一千八百一ふに千方のりのあつす一 家中下 あるせり
处室の江戸写ふ今と勢りくつをいきうたふ徳を

佐久間町 加井田糸ふ 朝霧通丁の下天井 村松町 芦遠内又 浴石町二丁目

浮舟の東前は船底あり通りくりあひのく模様もあり今ある橋
から元橋の橋とありあひの橋南の方川中下唐船と記して一艘の大
船を画り 考 圓内院山門あり ま 豊原ふけんどん町あり ま 壱原あゆのきりこ紫
とあら宝鏡の森 ま 八丁堀も流りて、舟が底のまへ幸の御店 えいあい 猿地溝十郎町
咲あリ ま 小鹿町江戸町志水町上町 じみともと 寺の東あり ま 駒籠駒橋 こまのま 今之浦城
焉雲も煙向よ蓮葉の形 じゆうめい もありともとよりかの湧かるを禹
あうちせき井町先人浦 じん 木よ経度あり赤坂氷川社根津燈籠觀音社とも小
曰比 いそ あり高羽町を圓圓なり越戸天満宮向経度 じゆう 深川
新守町後方とも丁字方とも町筋草木丁字あり鉢弾
島の都京缺中度古邸あり永代鴻ハ棲るを海ふさ さ かくあり
是處も傍へ由ト入浦みて永代鴻ノ尉せり

天和元年 事酉 九月廿五日改元

二月予因玉復坐于宾刹 上承坐八隅列焉壁面也後移下 亮賢冥墓 立月院家と號す

○唐草川廣がる ○塔小肌膚 毛皮也 ○山也神田の名也於萬年より是
年每小都也 毛皮也 ○日蓮上人に百年忌 法苑宗也 ○十一月廿八日丸山を妙
とうが火事にて延燒亡 ○十二月廿八日川因り寢也 死也 て因る有

赤坂麻布ニ田舎ノ牛町ト也 ○今年又因核防掛船あり矣の
余あ服をう幸御一つ目の橋降へ源の假楊を設く今、又を元取
と而十五年の始元緑力事よりて之へ經營あり

周二年壬戌

二月六日市谷尔あり一獲本山天龍も薪火よ遂翌年に若く
發する ○二月廿八日能人高山宗周江戸坐車ハナハオ

升幕以 シマツ ○二月廿九日持時雪作車

○七月瑞師本十順庵 口坐ハタツ。假称車ハタツ。先 ハタツ。常忍久茲那鷦鷯山下
禪作寂以 シマツ ○七月法藏人淨彌禪信の於天下一の号を傳くる

○同月左形船の寸法法定あり ○八月朝鮮人東聘 正使尹趾寬副使掌
夷制使事朴景文使

率其子 キサク ○九月安完凡濟船を解ひしをゆふ

族被と シマツ ○九月安完凡濟船を解ひしをゆふ

○九月引見僧教東敵尚小祀をゆもす学の審索を達不思中

高とも竟經を絶一經坐を達る ○青山権主至長保も古洞

佛跡除泥像を安置以 シマツ 菩生平年也昔東寺野寺の内すあり一と太坂

城やへ移きまし——。歲歳の後は乞持奉り今村系うハ丁燈の店
舗すあり——と夢守傍念を尚ふ約して今年九月送るふこと
○十月晦日戸田彦瞻う男御重翠車を墓前淡糸金額ちふせ
ばふとよ向むと云様世の坊茶席こむけの○十二月廿八日東下刻羽込大因寺おがひ火
葬牌の寺人の初めのせば。○十二月廿八日東下刻羽込大因寺おがひ火
車に上御下谷沈のちと筋遠山門御園のき日を擱まで淡糸法事
同法つる喰町辺矢の店舗あ國楊燒屋幸所深川ふかわふくわの筋井
のてて被火ひ此火ひ小隅にて枕室を失うりの或は燒死怪死人木縣もくけい天神の臺壇
主ぬし書籍の科一ふ二万本の蔵を負人不施せりこの脂油あぶらのちと付丁勅学處の市店主毫
木火入てぬ年求立ける内かの古籍一万にみ限巻灰燼くろりとあり——。——。——。——。——。——。——。——。
店主火ふうこまれ氣も潮しおひう煙火えんべをの色いろといひけ時ののあうべ。——。——。——。——。——。——。——。——。——。——。
元の田圃たんばと織る○湯瀬ゆせの町廊をねせられ梯はしる場ばとする

天和三年癸亥五月室

- 正月元日大鳥波おほなみ○正月車長持を拂せそよぐる。火災の附つきの
○二月六日市谷いちや火ひ○二月十六日牛込うしこ火ひ
- 吉者よしな小路寒落さむれ落公行こうぎょう十向じゅうこう。迷まつめ日ひ
走はし立たつすとそ
- あこづき草のり葉はいあく。林はやとも赤あかも松まつをうすむとそ
- 車に筋度すきど走はしふ歌うた。○二月廿九日羽延行町はくえんぎょうまち八百度久無傍くむわの娘むすめ
お七火刑しちひぎょうおひひ。今年土つちとりと頬ほま世人じんの知しる所ところナニキの春松竹梅しゅんまつちくばい
あさる。首くび七面しちめんのまう——。すうちゆくとぞつせ——。——。——。——。——。——。——。——。——。——。——。——。——。——。——。——。——。
ありを世寄よせよ舞まい波なみの家いえ再建さいけんする。而ひなう外ほかを鑿あて湯源ゆげん。——。
- 夏江戸大旱ひだり久ひさ○六月六日玄蕃草内率くわんぱん。玄蕃くわんぱん一素居いそゐ坐すわとづの宿しゆくりつ
墓はかあり耳底みみ泥づめ山さんを拂そよぐ。○雲光院草柳くもみやいんも法縪ほうねす。引動ひどうも坐すわを率すわ
人の妻めを夫め。法勇ぼうゆうの人ひとあり。○雲光院草柳くもみやいんハ百度娘ひゃくどむすめが七十しち年の家いえを定室じだむに年
の後ご後ご年ね作つくりの邊へう源川げんせん。移うつする喰町くちまちの如おすあり。於行おこう約よ。

うつる。○十二月廿日、江戸焼合里小方。
方角未詳。○下り作務衣旅擇行。飛或鳥内
走度に近地と云ふ際共妻の
ひの編子と今年正月せむ。○紫の一木写本流。六角景勝作。

逐年間紀事

安宅丸の御船を解せり。時あ水無河岸があり。御船を被

大船を、並まし一川の東岸の地へ移さしくる。

○大底形船を修へる東塙丸。漆屋橋。御田市丸。熊一丸。
山市丸。日本橋の船へ渡る。さて大船ありし。漆橋船の名は某の一年、江戸
船子拾達等不あり。奉師会考云天祐の以小山田江戸市而とりよりの居人の金銀を拂り
繋ぎて底形船をもひう。奪ひえ或へんをも殺しけるう至る町り。不隠匿夜ハ川脇ア
町を越を止め。町りごへ元締中主をあう。一と戸を拂ひき。一とそ

○狹宿跡見十方道。遙流を後十八年を度て室水中央を許す。

○千川上水が本づるハ近室天和の坂あり。一板橋の方練するのあ

のうちふ御の地の方どうり車に法事及び押舟筋ふりをき。一
流を千川上水とひふ。享保七年より止ぬ。又同一年半店の内後流
川の内流を業平橋筋ふり。又半店中ふ掛くを向塔上水
との足も享保中流くるを上水の川筋今も業平橋の東水の方
の橋際とうり萬葉歌世淺村の方へ通りて小川へ流す。是別名自
塔上水の筋あり。参考小方。

○御田永富町の地へ移行。若川町へ尉が本庄を置ふてあり。一
天和中移行處が下谷。引けでを跡町をもあつて永富町と云尉が
家へ松平下總守佐藤義とあく。一後室水の以町をもあつ。皆川
町より松平町代のふもえ浦ひまで。今田孫井慶朴尾家所
中たもてあく。一なり。○太の以土作筋海より流れを

○天和中渡者ち經通へ商人の舟を入鹿へひとう矢火にて
燒亡後再興あつてと也

○紫のつちよ日本橋一丁目屋敷の腰附流町の御手代ハ助也と
もすまうける沈のものねん安養院本原す場の苦役係せきの
陳二度唐院飯田町の臺廊處は温殿云々とあり班時代の事也と也
ヘヘ○此以をゆり一喰比丘尼の内界田町多町多町多
玄が娘ちま川井作とりよう名とあつてとあるまとう羽二
重の披頭巾をうるみよつてこまを縫ふ贋と名のあつテ又
室のひまであり一絶句といひ一毛と妓ふとあり

○班時代小島雪山を書ひる一幸小村氏とし雪山ハ抱後少瀬本の度トク
而立かず彼のニミカツニミテノヒト滑落トシテモアリ雪山江戸小寺ノ苦葉の傍
と因伴してまゝ山涉焉ある本の後宝町原世小源ハ偶居に附ふ延宝年中ある
ヘ一人人立六歩あり度深も四一人くらべハ二老界付小あ
老と雪山度深の二老あいヌを世時人爲ふもゆきうその付をもつて

○池乃鷺鷺袋圓行了勧善院の子翁僧教ハ羽忍の產より初め私業不換一代
三年ふもイ去年を賤を惜せ一指痛りまつたる小夏巾把芳與極等の尾山如
定保師とく葉法を授て妙小平倉を以てうる遊の聲の内どうも免かれて換くまつ
とて遊袋圓と号は後あるて山の林屢不表せらる裏行サ二弓の市店をひきはせきを
ひきはせきを志然の料を乞は葉御妙あるみをさふ寄海は是小隨て江戸昇進を
みそも似せ葉を調令して妻の夫ととりのみとあらひ男童を攬て五十人余
を養ひ市中を徘徊して妻の夫とこれを方翁小告て云是を誇むと宣下
の事大河へ廻るへる廢はれ大引あつて被へと善云才志示してさうあらむ妻
の夫の一つあつと或へ又曰若被う葉人ト崇あらむ料ハ是不ト換をへる言
日月がまだ小鹿に帰て天正四年と同音數回小て互不大笑てからとくとく

貞享元年甲子 二月廿一日改元

正月晦日彼忌令は定 ○元三大原七百年忌

○知足院を湯島へ移りめり高代ハ林田のまふあ

○弘法大师八百五十年忌 ○七月廿日古事二代祐法卒四才

○東後ちせ弘法大师下谷より麻布某堂坂へ移り

○九月廿二日官医是木玄琳卒麻布祥雲寺升葬す ○九月大風家風を吹

るを司り貞享度七卷貞享吉義弘法通書立卷を編述せり ○甲子江戸鑑利行松金景枝或鑑板行の始トヨ

○赤せ改舊領行但宣則度を改めず不等す

貞享二年乙酉

二月廿二日流星東あどうゑ也充ら光報而里を喰ひ暫く
穴で空升署あり霜の如一 ○甚ニ因魚蟹觀音閑悵漆井アミ
来外山城わきとこの親事三田の山根半丈さかねをセド ○五月廿四子福昌もせ東源如來冥往このとき

の後ある
ふ造立する ○日暮里後方は新社造営 ○六月濱京守智床院別當
を正教主至東嶽山濟兼常と號す ○九月廿日將時山真安作草
七十 ○十一月靈山寺再檀林と號すは西康美すありえ孫
三十 本年小中西トヨす

○同三年丙寅二月定

正月一日古事記世ノ周年 ○閏二月利根川義と武彦と一
を主と下總と定めひ萬石歸那二ヶ里小中了東京橋より東洋川本西の北へ
其義至トヨは古下總小属せし今年 ○七月般忌令出改元承之年八月遣加
者のことく其義至小属せしめなり ○七月般忌令出改元承之年九月遣加
同七年四月 ○九月品川佛殿成 ○九月小石川向山檀現多幸礼始
出改めり ○九月品川佛殿成 ○九月大小神後組と号りへる焉當を
すや奉り通すを御す ○九月大小神後組と号りへる焉當を
罪科不犯せしむ未發想と云當を詰め難く言く妻孫
湯葉ふ仁本組とすと付會あり

同に年丁卯

二月十八日より清系幸親世音宣帳○同守二十五門令綱親世音
勢至縁建立無モト延喜式樂部破林も廣義主場
直房伊勢守屋井若高齋等の事建立

○江戸熱麻子七冊揮行 他者皆田氏

○七月廿二日より廿六日まで奉前主として家は吉多丈効進徳奥行

○女園訓蒙國彙校ば附代の冗俗

正伝女貞享に辛丁卯十二月十二日とあり

養農院本溪町小野川母塾をあらわす
と家を立て父母小暮あり後、三輪

ある村田傳をもどり者再嫁へて自操あり不辛少へてよく支ふつる父母再嫁のみ
と近づゆ頻あまびひそく食を減一日とても食脣を病ふ臥一まよ食を與ちて後
す附御葉落はまくでての事の後までもねの操の色へくせー 凤潤塾を廻とし
その貞操云々かよある

三田升実本寺ニナ寺ありこまく春町寂照山實お寺
のさ

あり

卅年間記事

貞享元福のひよりに谷村重義木主を追ふ下る。

○貞享冲波くわあわりたて橋流はせりるまきり拂はまかーとりりり安
彦志科ひじ不冲古田冲丘隅宿澤きうちのあわりとて船便ふせん一トセーと
りりアリ 因由玄冲古戸の二大橋おほはしとまみほだの橋を
ひかへりハシカヘリ 元福の近巷人のおひそりありとあり

○羽迎光源はむかへ光源こうげんも大人親育造立はむかへの町人丸原吉兵房寧ひやう寧ひやう追お
町座ざを求て萬まん不寄附まつ ○千解通せんごく 一今不寄花まつの科くわ死しつ
とりよりの工くわ立たてても末すゑーとひよ

○江戸河村隨くわ見南新屋くわ屋や丁目よ移い居す 逸町へき入いあ角くより是處そこ島室丁一
川岸がわまえス方がたの通り道みちを矢本土やもとをふきを傳せ裏門うりがん新川しんがわの表門ひょうもんの浪田町なみたよりふ寛ひらく
居宅毛葺土造立きじの爲ため廣瀬後町こう町まち重じゅう毛葺けい止どホナなくこれと隨見くわいの牛田うしたをひく祀まつめ理りを考かへてく家裏いえの事こと
司くわりを切きりづくに不寄附まつ ○石塚いはづかを引ひだをあらわすと云

○貞享のひより太森村の辺へて海うみ苔苔を剝むし取とり

○其の時代の江戸國城革くわ花川戸かわを松門まつとあり

○好古日録云 婦女の善く用ひ笄かみへ貞享年方濟厨子門前ノ故
候前もさうめて工人小服こふくも後後ごご十数年かれて室内有あ弘
まつてアリトあり

元禄元年 戊辰 九月晦日改元

妻妻卒前めめそくぜんの地じへ元の如くき妻士志しそ加賀町尾おのままで姫田の地じと呼
はれはれる年の西にしぬくとそ車店くるまどを車くるま西にしある
もあ板いたの出で立たて御ご吉川氏よしかわのあとあとて葉はりす ○庚辰靈山ごせいりょうさんも車前くるま入いる

○九月祚田明神祭禮祚裏くわのうち練ねりお始はじす 汽城きじゆう内うち入いる

○十月二日儒師じゆし西山健甫車にしやまけんぶ 年次ねんじ番ばん板いた本もと
養正院ようせいいん小こ笄くみ

○十月十八日連寄れんき儒里村昌程車じゆりむらまさと ○十一月祚田櫻浦門節くわだながほ門節もんせつ元院
を移うつすと清行きよぎ移うつ勤きん所しょとなりて亥年いと改かて篠波山復持院元院
寺てらと号いふ 俗ぞく風ふう時ときより移うつ勤きん所しょは日八年八年

同二年 己巳 正月室
正月十二日儒師今井弘政車じゆしのみいこうせい 号魯齋ろざい車くるま
妻被めいひ小こ笄くみ之の
○正月十六日以い日老人星じろうじんせい觀くわん之の 老人星じろうじんせい之の瑞みずゑ有ある正年じよ
○五月十六日雨天あめのひ二十日間じまん坐すわて候まわ家いえの居ゐ福井濱ふくいはま左衛さゑ兵員へいん五
千二百せんにせん方かたを被はて戸との天下あひと激げきる

○十月嫁ええ廻まわの附つきのあいせ師じ利り禁きんあり

○十月廿五日夜異星巽ひがの方ほうある ○十二月山村季むらむら吟ぎん翁おきな男
湖こ妻め也や呂ろお寺てら學がくの方ほうの姫ひめあり 同七しち年ねん法ぽ下げ小こ叙じゆ也や

○江戸圖鑑總目板かうとく行ゆき 画工石川流宣作之 ○再訂江戸板かうとく行ゆき 原板はらいた一冊いつせき 十月半じゆがはん
不角編ふかくひん

同三年 庚午

二月虎口とらぐち門もん即そく左さ夷え町まちを由ゆ波は南みなみまで大工町だいくまちを元もと材木町ざいもくまちまで

度瀬ひろこうちとある長崎町の度瀬を廢長崎町の延度小路を廢す。桶丁の弓くわの廻まわも大工町くらしの町とある後炮

海鹽地海ひあいじかいを小屋定を達たつめぐる。

火災の時の
もととそ

○四月十五日而多化はだかを高麗店こうれいてん小室こむろ無上人むじょうじん毎日会佛まいにゆう會海教かいかいきょう信

群集ぐんしゆ一十念じゅうねんを文ふみ書かの名号めいごうを乞こふ事こと歟が—

○五月壬午感應寺壬午丈六佛じゆ建立りけん來洋

○十月庚午金剛工模谷字ふと終かとう○東海堂とうかいどう間繪墨样まんゑぼくよう乃

妻めぐみ夫おとこ機き麥川師宣墨ばせがわしのぶ○十二月廿二日昌平坂大聖殿上栋うなまて思ひ思ひあり今年この西にしうらへ室

此この房ぶさを

墨板ぼくばんと改かる

元祐げんゆ乙年に辛未に八月生

正月陽嘉升大聖殿序普清潔よせうせいじゆふきよせ上號じやうごう下號げごう是地是安ほんぢほんあんは林泉りんせんの持もて

上號と下號とは地是安の持て
る所をあつて以て號ごうを付せられ三十哲さんじつ乃

出生榜じゆせうぼう古名こめい昌平榜まへいぼうと改かる

頌大成殿新落

芝山

登の昌平坂峩の士の山東斯度の斯經始の倏忽成廟宮の祿功の依の勝地の莊觀聳の清穹の畫棟麗輪の真鱗薨の玲瓏四配玉床の下雍客珠箔の中三才抵の太極の六經定折衷の禮樂字雅飾文教克礪碧山の知仁有樂川の盼道罔窮時否欲浮海迺の歸魯門豐祀誠如在の吉蠲捧芳樽の神明永降監國祚齊乾坤春入舞雩節代雨澤黎元の

○四月麻疹流行ましんりゅうりゅう○同九月能人一押折不卜卒おひしおふ本不法忌

○同十月能人福田善云卒ふくたけんじゆ

○四月碑文各法苑字皆也威寧

市名自院法苑字聖因派ひいんぱい

ある天右宗てんしゆうとなつる七月因華字

- 怨田派の傍流豆野川へ流する○今川橋より小川始て堀割る
○六月十八日紀元根東尾山観音渡入東辛立百十一年忌真敷
大作と達号をあふ○七月官医軍井ト養罪あつて仰ぎ、之を完
騰く流さる○八月湯原靈雲寺西延立あり屏山海
○十一月十九日茶人清水初國率星宿紙菴牛島
弘福寺下葬
○意滿庵空無上人勅化して造る函の金洞立像の大地蔵菩薩
服ありて江戸六罰不す川ち院寺善源記等本
都暉事記りあり
- 館優か木辰之助篠浦不施行也五元集辰之助下り事記
○骨を集めス浦六辛立卒たま子を引てり妻大種喫奉小名にて家カミシイ老
達あり先孫に手寂せてもきくあるを康井不眞る事と以ちてよる若柳立翁の後
小口時代う意といふ人三人あり康井立翁信之今き人の子三夫へ候あつても若柳の
去あつことあんじふりやめきのり立翁や洋あひはさまと太とあるとアモハサモ
居の立翁あづ一柳立翁が草花かともあつ一あんを
風の立翁あづ一柳立翁が草花かともあつ一あんを

元禄五年 壬申

- 正月元日東中の勝日賀半○淺草寺親善堂造営
○大掾復坐寺佛堂拂建立○六月五日より住世長老ち前立
如來圓向院かて寔帳幸田若老丈婦子母三人の像
波多野の邊内ゆゑく立寸才四寸ありけり那ヨシギの簾幕をとりてあり
牛馬長命すの歳ミタニ一ノ江戸不歸ふて二丈幅小のみまかく
の今ふよりてもだれもあつ
○九月濱京川、筑前町より至天町まで數せ禁物のをれを
達マツル

同六年 癸酉

主犯及後まち法然上人自愧嫌江戸を去て安眠もも度
末洋
○七月僧師鶴禪慈惠草名ま被称令平
羽込童光も不葬○夏やるのぬを乞ふ
世上小疾病行る事を告ぐるどーの好云ナラビ般の時ナラビとありてこそ
を除くせ法の書物を揮行せりかくて壯族云を賣かセセセ若
ともを刑せミミミとせ元

○五月龜通町を小川町小石川御苑町を安坂町と改くる

○六月廿八日拂作ミカタ角二園社ミカタを下め乞の匂を吟ナニギ奇跡考不
記を引てあく天不卑顯ミカタ田面ミカタみちミカタも角ミカタの匂を
拂ミカタ源更ミカタてあ隠ミカタるどりミカタを承ミカタ也社ミカタけミカタてあり

○七月新大橋立年あ櫻翁名を大橋ミカタとりの友支ミカタお對ミカタして新大橋ミカタとりミカタえ孫
橋ミカタの上芭蕉ミカタ同ミカタ大橋ミカタ一財ミカタ○八月廿九日角二園う父櫻中東吹草立年上行
あくもいひて櫻橋ミカタの裏ミカタ日ミカタ○八月廿九日角二園う父櫻中東吹草立年上行
葬送ミカタの場ミカタ「一枝ミカタ」深ミカタ角ミカタ
本の事ミカタも原ミカタ氣ミカタく

元禄七年甲戌五月室

正月八日將於洞雲益信草上院不葬○七月廿九日品川左衛ミカタ燒失

モ復再ミカタ○六月陽清靈雲ミカタ冥ミカタ八分真ミカタ云津ミカタの卒ミカタと歿ミカタ

○六月廿六日杉山檢校ミカタ一寂千余才○七月淺草大護院ミカタ不轉ミカタ勤ミカタ葬ミカタ○七月淺草大護院ミカタ不轉ミカタ勤ミカタ葬ミカタ

升堂子ミカタを含ミカタては他ミカタありミカタ○八月正覺山ミカタ桂ミカタ十刹ミカタ不列ミカタ

生ミカタ文殊院ミカタ八刹ミカタの事ミカタありミカタ○八月正覺山ミカタ桂ミカタ十刹ミカタ不列ミカタ

○八月十四日小塔改尹草七十才号蓮雲林燈十郎至卅度次男也以大護院と改む事安寧年十月十六日死

柔川淳ミカタ不葬ミカタ○七子云一深ミカタ○玄因究八幡宮社地水室明ミカタ

を勧請ミカタ○江戸名所詰扱行ミカタ七卷

○塔上寺世二世貞叡上人大悟正不往足ミカタ代ミカタ大悟ミカタ也ミカタ

○十月七日奥澤村淳ミカタ冥ミカタ阿彌上人寂七十七才

- 十月十二日芭蕉翁源死寂以_{ふふえ}○十一月十五日予入山名至山草_{冬義}市若佐丁意照
院下葬以_ふ○同十六日吉川收足翁草_{七十九才}

○十一月射吉至大门口_ひそれを廻_{まわ}る

元禄八年 乙亥

- 二月八日未刻大風に谷傍る町どうか火せされの辻海辺まで焼亡
○三月儒師谷一痕草_{名松号已十泥谷}長谷寺下葬_モ○柳原押夷翁爲候官候
内構木牘乾○五月官医余漢古彦草_{八十才弱}於孝子葬

○五月英葉源元師子園源号を追拂_{めぐらし}一あく

- 七月渡函寺正五侯正五任以_ふ○八月羽目奉所延澤ち入佛供
養あり_{北山源像を拂列以是松雲源原身も幼化て刻}ちうあき法事拂歌ハ大きく若葉山の揮刻あり

○九月明のん翁深作寂_{水戸御室主のよ葬}拂原屋基のちあり

- 金銀を吹盡_{きふ}九月どう通閑_{ちゆまつ}元禄金銀充字金銀と_{元禄金銀充字金銀と}
○十月冲財小太小庵を建_{たてる}○十月十六日東嶽山二世公海傍西遷
化_{寺八十九}○十二月般寺庵楊邊_{ちやう}よりお入翁橋まで焼亡

同九年 丙子

- 永代橋塔て樹_{百十處}此橋のくまうるおひ船橋し中内_{シミ}之を御ニ奉の事大波_一と
み黄今の幸橋を永代橋と云ひ_ス或虫子見えう永代橋塔て樹
李_{アリ}の月_{ムツ}龜_{カメ}○正月十四日官儒人因友元財貯_{マツル}市場小率_{久節}
号竹洞

- 二月牧財廣海室洪臺を築_{ちく}せり_{まき}て延澤ち小網_あく
○五月廿四日上財中坐本堂_{本堂}の落成_{なまこ}如來_ル江ノ志_シ那田山寺_{山寺}と_さり
近_そき_き同廿七日十二時日光月光像が羽空_{ムカヒ}山形立石_{タケ}すより
移_シせ_る○金銀漏度を定_{さだ}る

- 六月十九日大地震○十一月十六日東嶽山冲凌雲院立_{シテ}翁僧正

近化訓点法變傳院度尼多く上本を
こきをせふと傳車とり

○十二月十二日水府度傳居平賀雪葉草車ひのせうえ
公年老家ちふ義を
碑文の草山紀傳の有

元禄十年 丁丑 二月 室

立充集拾選 大小の吟

大應四六ハ九士十二應をあらかじく集 帰をいのち

○正月十九日北村湖草率辛金才

立充集 欲喜をいづみて

源くよも縦冊もありむと 爰

生角

○背法延平小圓美大师の後事をあふ○垂子村先洞幾を説いてゆる

○下谷立東天祚今ノ前不達首へ上坡不立天祚火災は懶川監督者子
初不達度あり一より今年移されも照門
昌信之○酒運と法定○五月八日より引大橋不許て室生寺と鹿

勅進神奥行あり宝生を支
助を頼む○六月御茶令通用始す

○同月碧岡こうとう十一人ふさる○七月より後坐す。齋吉坐渡持院

大日坐法建立○九月龜戸天満主神の法式白川若田不復ヒ
トシ左寧府の例不許アキラキスをたす。勅許チクキスを蒙がる

○十月十七日大塚上の町どりお火祭を奉。小日向牛込田安門代役町
まで燒そば

坂田町世羅舊の代ね草迎演君の屬中のぞめいの諸事。あらへう第ねは豊町底と成神主移
モト豊年達立ほりくに足富の迎吉傳をからふ坂の下をうちを坂田町と考へてあり

同十一年 戊寅

正月十二月馬人桃園柳岸草車タニモト老号幽香齋
北上車門ちふ草

○二月川村隨員さわげん石室草率櫻祿をめもる天和二亥年ホリ梅子の貯
享甲子年也より大坂川カサカワに舊傳を命ぜうき切議に戸小降りて草車と改め

安治川も改修成たり○五月小石川濟殿造営

○六月九日医师板垣宇麿率度量合計奉辭去○七月傷師圓井鷺巣

率名義号東臯○七月深川海々一万坪を築立海濱と号

○七月廿二日新替白金浦殿まで移りめぐる

○八月初日承代楊今日どう御來候了

○八月東叡山根本中堂文殊榜元々二重門并山主社

今の西 浄建立

廿八日沖堂入佛あり九月三日他甚五日どう老人垂指をゆうする御廟の事一筋小福縁一山門雅を立つの地もあらへてあん門あの町至をひいた度小波とせきこの時より平永町八軒町京町車板町のうち某小柳町里門町ある拂せまし神田とあの邊へ代地をあらへ

南郭文集 東叡山瑠璃殿

一旦經營結構新入門何處避紅塵 玉樓金殿高多少

不庇貧民七尺身

○九月六日改修殿の勅額到着ありび勅額持内院奉行に書かひ所か後量りて三重の柱を木本をして造り柱上に額を榜別板を自紙にて文章を施し
御中堂の堅模の太さからも遠のあと御柱を能くとひくとほを書して

殿質不体よ拂入參ありて改形刻一漆塗留を施

金奥を廻て紫宸殿の前小値で立す室在下下りて

○同日已刻正新橋南端町どうが穴あ風烈しく大名小路通町崩
御園下岸野路奉行深糸山谷半幅拂衣宿せんよふくわくじゆく九三井の深糸

世二方を並燒みて元徳十ニ年より源川下達役亭庭河を繰て

河をハるの道役十五ると成る○三時源川下達役亭庭河を繰て

を次日車橋靈巖游八丁船旅船泊綱焉まで燒る日車橋燒原て

人多く死モ○十二月画工を賀潮游漏せしる平六才民板町一丁目

○十二月廿二日傷師本下駄店率きのと名貞幹林草木元

千束村小糸毛

元禄十二年 己卯 九月室

友國横山町縁矢の法事去年災後今年二月西門跡東南付、
屋根移すより汝凡と山家もあくや、京保の姫以深草山處、
「不よ御」とつゝ、矢の山處の跡へ町を度小路とあり大字は井沢町とあり、
度半にたどり別矢の山處あくべ、處室の屋みべ、矢の山處と記せり、
平丁役も有りとあり、又役を走ハツの山處あり、左八の山處といひかづく、
武彦志科云柳橋ハ柳原のまほり世より柳橋といふと傳ひ是小戸役あり、
のあ茶研場小うちきる橋を元柳橋といつて下附して、只今ハ川瀬波
橋とりよし西へいへ、又玉橋この辺より一里、先古主と云ふれふ今ふ矢の磨カマ、
而小度也海あり、昔、度小海のもの、方より大溝あり、是昔の矢の磨のみ頃の傳ぢり
え福の古事記で、初よりさうば後矢の磨を引きてその跡まで禍氏の豪宅とある
が、ホ今ふよりてまた禍氏の支流壇ふを取たがふちの、是久く、ね本あつ
列庄とあきらま禍氏の支流壇ふを取たがふちの、是久く、ね本あつ
俊明と名き財介よりの今林のかふはきのうをきる才算記と云ふこと

○二月祐天和尚生冥大嵩カミとふ役職○に月に日没の小角千年忌法事
筋遠近まで焼亡○に月に日没の小角千年忌法事

○八月十九日大風○九月六日川村隨見卒已矣天賜す
升華モ

同十三年 庚辰

二月下轟車坂とうか火庚、京邊店舗を失うて焼け、燒亡

○渡國ちよそ城州湯濱源清津守釋迦如来冥懶已月廿七日ト向おり一月
一十五日迄八日日の間あり、はすをもはん船頭船頭の冥懶、
一十五日迄八日日の間あり、はすをもはん船頭船頭の冥懶

解体駆逐

とぞ

四月、ハまぞれ、うまひの下向モ角

○永代源築地六万坪減○八月十七日、もと葛西坂塚村、父魚親世考

お現とう、辛ニ年間、よそに冥懶○深川佐賀町今川町の邊ふあう
材木因定六万坪の地をめぐりて引替る、今の本切あり

○水井辰之助山村長をまち、居て七変化の石龜をもつむ

同十四年 辛巳

正月元日卯辰別日缺ノ○玄紀云、永代橋の邊ふ大河内町、何事殿
禁タク

古屋あり。今、年正月元日亥寅、何の事とも知らずて女の首
被り。人を斬る。又某首より人の足を擱く。奉式門の祥瑞あり
とて是をまくり。堅牢地神。小室あむ。其人退て。後。又ひのう。敗走す。
尾の社あり。と云ふ。一ノタリ。今も承代様の祠。小祠也。

○二月十九日吉。第五代。子。辰率。八。辛亥。○二月。天波宮。八百年
清忌。東年。お國。お村。毎戸社。お於て。清。寺。連。佛。身。り。あり。

又元集。主角。のち。升。ね。梅。や。あ。む。年。八。万。石。○二月。京。真。如。多。秦。主。子。江戸。かく
寢。帳。來。洋。○三月。十。日。清。財。家。吉。良。家。事。あり。一日。之。世。人の
効。る。不。也。後。升。贊。せ。ば。○二月。麻。布。拂。殿。初。て。お。床。

○三十二。間。坐。深。川。不。接。建。立。立。え。集。新。千。字。文。
若。葉。や。き。の。よ。の。集。又。本。縁。賣。主。角。

○深。川。海。濱。吉。祥。寺。寢。創。并。才。天。を。安。立。八。日。基。御。院。

○風。櫻。不。と。而。て。奉。初。法。恩。ち。主。升。非。人。小。庵。を。建。る。
○十二。月。和。人。冬。長。官。門。安。清。喬。奥。延。修。法。の。三。人。く。高。ひ
序。免。あり。

元。福。十五。年。壬。午。八。月。宣。

二月十一日。に。谷。滝。町。さ。り。お。火。青。山。麻。布。を。せ。浦。品。川。升。も。
あの時。麻。布。拂。殿。品。川。拂。殿。め。玉。立。主。横。二。王。門。燒。亡。品。川。拂。殿
あ。一。め。玉。主。の。房。至。き。下。○二月。十五。日。吉。奉。帳。の。上。升。拂。殿。主。帳。を。立。る。

○また。もう。葛。西。波。振。村。夕。只。觀。世。喜。ひ。ア。并。迎。を。どう。し。多。修。羣
集。する。事。殿。一。村。長。の。あ。と。り。愛。あ。の。某。と。て。か。け。鉢。効。あり
と。て。然。人。こ。と。を。求。む。又。近。ア。西。の。ち。院。も。立。七。日。つ。も。そ
毎。祭。せ。う。お。堂。だ。ま。す。並。モ。村。内。の。社。

○天。滿。主。八。百。年。序。忌。西。行。上。人。五。百。年。忌。宝。瓶。法。歸。三。百。年。忌。

- 七月某日爲行靈告板の檼とて靈官をかげ眼疾を至る
よりの法にて驗ありおき おひあへのえ
- 六月廿七日陽鴻靈雲どうぢんも冥山津嵐みやま和尚覺彦比丘寂世じくまつす
近世の頃也ごろ ○岡八月廿一日寺人北村正立率そぞう妻吟めいの三男さんあら第
と改かえしト 改 かえしト
- 寺源村百姓僧方參さんら娘むすめけたの叢中むらわとて不動尊の像を得
り迦南かなん新法象もよ納なむ 田舎員外居候 むらの中なかに参さんらまま一いちを考
あるくあるく是夏なつの告こーく之の契けいも勤きんもとりふ
- 貞徳翁じょうとく立十年忌忌 おとし内うち十五日じ候まつ四よののを
解と花はなも花はなも花はなのむむ も角かく
- 十二月十日後代家の兵士ひょうし四十七人卒そつ意いをよそへよそへ人々ひとびと小輪こりん
矣ゑもるとなりて

元祐十六年 考來

二月十四日後代家に十七士自受じゆう家いえ也よ葬くれ

- 新様子喜悅きえつ寛政かんせい かんせい多おおきの身みへむへむううりううりあり みまよ原經はら小こ柳やなぎのも榮さかを
ああくあ死死の山さん ちちともふらふらと南みなみ也や又また祕書ひしょ文ぶん古古事じと記きせららのありあり用うの書
名なののを
立た小こ考かう
- 東深監とうしん行ぎょう 東城紀とうじょう傳だん 从不記じゆふ 追加从不記じゆふ 从濟とう記き
釣櫈大石記つりのき 檻花集はな 東種德とうしゅく記き 武家ぶけ因いん後こう記き 易水連袂えいすい深ふか
義人ぎじん孫室西廣そんしつ忠士ちゆうし筆ひ記き 見正せう 山科さんくわの文ぶん書しょ 忠義碑文ちゆうぎひ 碑文忠義碑文ちゆうぎひの二に年ねんハハ宋そう哲てつ宗そう聖せい平へい作さく
楠くす不ふ篇へん 陽光院記ようこういん 兵士ひょうし考かう 兵士ひょうし傳だん 兵士ひょうし文ぶん通つう
蓮密れんみつ記き 繁秀はんしゅ記き 兵士ひょうし考かう 兵士ひょうし絕ぜつ續つづ
- 春臺しゅんたい東穀とうこく早はや六ろく士し篇へん 稲本いのほん忠厚ちゆう房ぼう 東穀とうこく民みん醫い傳だん 厚保已亥
乃の然尼ぜんにの史しなり
- 二月九日儒じゆ作さく松田晚翠まんすい卒そつ 萬念翁雲下し小こ幕まく
- 小柄おの京きょう日慶ひけい再さい與よ ○二月麻布まふ赤坂邊燒あかさか亡む
- 四月廿一日石川後ごの居ゐ泥門どくもん幼おさ年の子こ猶ゆう竟きよう十二岁じゆ而で深川ふかがわ
世せ二に方ほう重じゆう不ふ矣い教きょうをを教きょうる ますうとうまうりうう聖せい日ひ年ねん刻こく上じよう事じをを教きょうをを教きょうる二に三さん百ひゃく年ねん至いた一い万まい石せき來きりり一い丈じやう丈じやう又また百ひゃく尺しゃくとと付つけりり丈じやう而で後ごをを乃の恩おん福ふくををああととかかん村むら山さん三さん五ご丈じやう傍そばとと人のひとのの門もん人じん
- 五月廿二日久保天德くぼあん門もんお吉よき急いそ傍そば妻め二人ふたりのの男おとこととははむ 二助

忠助と号す者

○十一月十日儒師坂井祐元卒

号湖軒翁達
龜光ち玉葬

○十一月廿二日宵より電流く夜八時地鳴雷の如く大地震
戸障子下の木家が小舟の大浪よ動くうち地二寸どうずふどう
て五六尺波割を以て水をさみ上あらひのれを吹きつる而もあま
石垣壁をかき壊^{ハシモ}せむ荒瀧を定荒瀧^{カタハシモ}あげ死人夥々^{ハシモ}に泣きげば声街不
置^{ハシモ}一又不^{ハシモ}く殿^{ハシモ}るかくとう失火ありハ時^{ハシモ}津浪ありて序絶人
する多く死に内川一もの落^{ハシモ}りはなわうげ財^{ハシモ}と津浪ありて序絶人
あらひ小田原の如く難^{ハシモ}く死亡者凡^{ハシモ}ニふ三百人小田原とう足川近
き方^{ハシモ}スみ人房^{ハシモ}十万人以上ニ三万七千人<sup>内廿五日火災の附あ玉櫛をそ
ざるより三七百三十人九千人</sup>内廿五日火災の附あ玉櫛をそ
あ^{ハシモ}一ゆりのよ傍^{ハシモ}り^{ハシモ}御^{ハシモ}深川世三間半覆^{ハシモ}る廿日日暮^{ハシモ}とく
あ^{ハシモ}う深方^{ハシモ}とてやう^{ハシモ}止^{ハシモ}む後十二月まで震ふる者も^{ハシモ}あり

正月詔免代の旨をもやうと多てうこうぬ序代の事^{ハシモ}引中院通管

○十一月廿九日秋大風車にて追うち火^{ハシモ}にて常^{ハシモ}まで焼^{ハシモ}又小舟^{ハシモ}う
お火^{ハシモ}て火風玉蔵^{ハシモ}と^{ハシモ}壯湯^{ハシモ}の天祚聖皇帝遼陽向柳東陵至茅町
東の神園^{ハシモ}うはす町小永町塔山小綱町奉所^{ハシモ}花向院の邊濱川
永代橋^{ハシモ}まで玉^{ハシモ}橋^{ハシモ}あの方^{ハシモ}燒^{ハシモ}底^{ハシモ}の五廟^{ハシモ}然る是^{ハシモ}を世^{ハシモ}下地震少^{ハシモ}事
もゆ^{ハシモ}○圓向院^{ハシモ}云親^{ハシモ}玄^{ハシモ}山門^{ハシモ}不^{ハシモ}安^{ハシモ}車^{ハシモ}ノ^{ハシモ}十一月靈臺の
告ありて樓上^{ハシモ}うちあらも廿二日夜地震の附山門^{ハシモ}倒^{ハシモ}てひて
廿九日の大火^{ハシモ}少^{ハシモ}傷^{ハシモ}て^{ハシモ}を^{ハシモ}お^{ハシモ}退^{ハシモ}てつらあ^{ハシモ}一丈^{ハシモ}う
猪^{ハシモ}人^{ハシモ}候^{ハシモ}りや^{ハシモ}て事^{ハシモ}清^{ハシモ}解^{ハシモ}集^{ハシモ}せ^{ハシモ}と^{ハシモ}そ^{ハシモ}一^{ハシモ}云^{ハシモ}詔^{ハシモ}と^{ハシモ}云^{ハシモ}詔^{ハシモ}
○はや車^{ハシモ}少^{ハシモ}能^{ハシモ}人^{ハシモ}少^{ハシモ}枝^{ハシモ}家^{ハシモ}度^{ハシモ}「^{ハシモ}燒^{ハシモ}少^{ハシモ}うされども^{ハシモ}様^{ハシモ}さう^{ハシモ}うも^{ハシモ}支考^{ハシモ}
梅^{ハシモ}香^{ハシモ}や^{ハシモ}一^{ハシモ}書^{ハシモ}片^{ハシモ}燒^{ハシモ}見^{ハシモ}辭^{ハシモ}枚^{ハシモ}童^{ハシモ}

壬午年表卷之三

元禄の娘村山換接信都沢島弁才天の靈験を得て計御の妙を得幸本一つ目ふ地をあひ一比も代へ弁才天の社を嘗む今より持人○鄰司さうし、若鬼子母神、清輝集きよひ、事始り、近戸町人伊勢庄吉妻建○白金骨林しらかね、宝劍ほうけん、加多屋正朝解玉の連枝を連玉本末よりうきの把渡玉、拂といひ其社を再起○白金骨林しらかね、宝劍ほうけん、車歎ち毎日くわくすへ高山尾峯と歲日延上人と号、○湯沸小百螺山風閣ひびらさん、宝劍ほうけん、高山派解院、この間の湯沸天満の下あり候今の所事のあつて拂ひを渡ましと稱す

○近戸麻子近戸馬鹿まづこ、奥藏あふ哉了壯さう、代の々名物大畠をたぶ

參考

△儒者八代海の名林弘文院妻常筋遠櫻内人見友元同玄庭林源二郎坂井伯完岡伯降臺所町木下営店、浪家澤田伯宗、系櫛深尾喜房、辻春喜、△神道京櫛吉川惟足、波府忠社宮室元八代源河喜慶喜良、辻春喜、△神道京櫛吉川惟足、波府忠社宮室△多麻邑三左夷、久保佐、木万代、而中村立長、△古筆國利、牛久山、山下町、富山牛高翁中、不仲、マノ底、△平漢牛高翁、不常軒、京櫛漢水室川、日丸櫛井上、市谷田町、辰山勾高、△連亨師里村昌程、因昌隆、因昌純、同玄祥同仍春、云若原野、△能活師、本芭蕉、本町一丁目河岸函山、不町に丁目才九山下丁工神、南小田原町、薩子、至寺丁同用和停勢丁不ト幸入日町、三角角、又帝兼

町山石町一丁目嵐電、南信馬町、嘉言停勢町一晶、草町二丁目立志又所多瀬町、沾池
堺江町林中子
△絵師幸町移附洞雲益伝、新橋多磨町移附養朴常伝、かぢ町、狩野永叙之伝、因丁移附本幕附伝、能活移附探傳改、因丁移附探雪之重、御田五郎町、狩野方鷹、園行移附又尚友伝、因外記秀伝、木挽町二丁目移附体田達伝、因不移附内記是伝、游守狩附春雲伝、因不移附一學知伝、八友町、狩附求る相傳、本挽町、狩附内通英伝、狩附之援
△浮世繪師、橋町、菱川右兵衛、因右方鷹、古山左衛門、石川、停丸考、松村源義、石川流宣、名井波、菱川右兵衛
△浮世繪師、堺町大佐様、葺庭町板泉寺、志方鷹、町役戸官方吏
從經度課町天波八重美、家游考妻新之、而课町役戸孫正房、壬度左美、吳後町虎座、承軍人形町を江詔夜、奉大坂町把赤、左美、於家町役戸次郎左美、村業勘丁對子又房左夷、壬度夜經度、周幡町、村山令、左美、南禪町大坂七郎左美
△上子り車底太傳、町三丁、向山左丸方夷、同研、△底二方夷、長谷川町松金三郎
通波町轟、左夷、月不山形、底市、底左夷、△底轟、御松、公由車櫛、南三丁目移村体、南八丁、堺一丁目、及奥底九左夷、均、や越云、或、△ある、向、長谷川町、廉財院左夷、櫻山町三丁目、体、蔓、中、櫻、き、手、少、方、夷、に、序、亦、△け、御、藝、往、舟、也、久、天、御、方、水、左夷、△大弘、櫻、其、田、町、つ、や、△ま、ん、ち、う、や、茅、協、町、薩、櫻、山、櫻、也、△日、本、櫛、南一丁目、因、草、屋、底、町、義、系、文、殊、院、あ、え、び、ま、る、△櫻、脇、芝、田、町、二、丁、目、あ、め、や、長、方、夷、△ち、く、そ、う、花、町、櫻、う、そ、△麥、穀、系、模、底、系、す、そ、町、柳、底、△修、索、麿、ち、ぬ、天、御、お、△娘、あ、ん、び、う、大、傳、る、町、三、丁、目、△敷、の、や、き、魏、町、十一、丁、目、助、熱、△と、こ、ろ、て、ん、せ、く、櫻、車、底、△見、折、底、課、町、市、川、底、△が、丁、き、り、や

言提主塔に町若主を奉町、羽揚が雲丁、（素良家、東根町、祇園在因、羽揚所、約形ひあ
底△多切とほきり新木町丹波庭与化△芳駿國、まかみや△食けんとん令於山下川
汎河や月石一令庭因、△あきぐせんべくハ丁屋後庭、
津方重のその和あうへこまこと極めあまきハ累す

○前ふ載るる菱川は浮世繪ハ未と小引毛、うるま川景美もば時代
の浮世繪序文とえ縦宣承の次行毛アリ

○此時代俳諧種り付始て世ふりも。○筆曲、坐幕、檢校、縦勾書
安教川寛政等の花都と、寛政小唄ニ味縁の上より

○つ隣り他朝暮私志の先（一々）、あとりふ小唄源流、授箭小唄

二方毛り、すりかに○幫筒鑑の身体とりひーも母にあり

○つ前切の節中古毛り、櫻、小引毛、此時代毛り、笑猿集ひアリ

○世本流小揚弓のみやこ二仲路道を博く、一表二百本、多くは
的中毛り、元禄の次第、小立角、赤頬とりよま人のりのまゆ

上毛あり而八拾はみの矢頭、近江諸改切の看板毛見、裏表の
上毛とりて以年、百八拾はみの常の事ふして百九拾定め或ハ七八
年よりのの程ふ世人へくへ上毛手引、源毛り（下畠）、（京師の人ふれて今井
一牛とりて貞享年、近江、下り波を興り揚弓、羽根蓬矢の源解、追考を著せり
すり宿の旅をまへ中のるふあすには、以とうばた唐うふ引毛實處の次ふつうても
後改切ナニケ所を再訂、麿子大全升
哉う今へこの懶がく廢毛うとある

○葛糸、辛ニ前ち院観堂毛門被訪え縦中、津清とよ山門義
紀ふく縫続に○澤、（澤）、（案帽子のたぢ）、（詔のぎりとね）、羽流

元福の末のひふ止家、（ひどり）、（観蓋）、（小室）、（事）、（小底）、（あう）、（ト）
りく○吉永の逃女、（あらき）、（ちから）、（向）、（北）、（北）、（北）、（北）、（北）、（北）、（北）、（北）
ま丁目巴底源右夷、（あらき）、（よし）、（よし）、（よし）、（よし）、（よし）、（よし）、（よし）、（よし）

居けりう列傳の寄ありて附同居り、自むくの怪にて揚立入

一けり宿の跡ありて、とくに是を吉川へハ羽少へ般小自むく
を考る事少ありて、是花街大金なり。又本昔の花井丹後
尾身のともうまきの例よりとを

八翁自き衣裳を算て、うら尚て考

○奉ハ町塔ニ丁同役犯候、多處文方集材木や手て世より
を多處候候方集材木を手て世より、壯士人元宿中候ふ太ち股もかく
人のふかく花街歌舞劇遂ひ種くの傳てをあへ巨万の富を費
一けり奉仕人の初筋也、たゞお齋せし

○近々真砂六十帖え砂中の主を奪ひ、小於人坊主をもて喰町小役主と今も
橋本町へ引移りと傳り。○玄家菜話より、主は嘉永四年から
宿國小を所小山列官を數て、はと云はば妻立病の持

社小山列官う靈祠あり又嘉永の後下酒井小平の反対者被殺
ち及在裏内復の不平、小山列官う據よかへけり。其後號すて元宿
のほまでへあへり、崩きて今いあくならり侍ると云く

○え福やの豪家、神田竹久町小役せし、尾冥店江原といひ、
唐松の根もの立像を得て牛嶋弘福ち、寧村一幸もとて之復
立石にて安善玉院（安善院）尾冥代の墓へ安善玉院不を
彼支拂の像もありとぞ。○え福中江戸幕藩主娶切を承す。

○元禄六年温清野のほ戸繪墨、お二丁目ニニ丁目の方志に、所
のゆ地ある町方志に、所済代ありせし御楊の役場と記り、あま
楊の矢の弓龜のあたり、一ノ目橋の際（ほりてあり、もみれ天あえ年
水石橋の吉洋ち橋とあり、今の島平橋とおせねしあり、は橋向西

村唐町を筋遠山の内山門の隙を壅す ありて商店と記せり 村松町に享
保の年も
すあり 肴の志あん橋や今のかくあくめ橋とあり志あん橋のタメハ今
のまく小網町を丁目の中の橋を志う記せり 今の中山下山門をか
ひやとあり月十三年の事より過満門とあり 上神清久親を重ひ今のかく橋
山と唱つて石の山とあり 大塚後山の門前皆田園もあり
○三圍稻荷社内より一匹の狼あり例の酒店を喰ふて其店の事よりと傳すと
いふと云ふ狼うしおとあるとぞ ふ猪いのしや狼おおかみよりかは猪いのしりく も角

宝永元年 甲申 二月晦日改元

二月廿七日地震に因まで々々々々々

○あ玉橋と新大橋の下よ道を替へる 去年の大火の事より 人多く死むるやへたり

○二月年号改元あり——祥吟

宝永の給下アキシモを承の事

翁室公

- 五月二日奉國流主源光祖奉國親王率さんわ 十日向を渡アマガハ
升葉川
- 六月十五日より七月朔日二日江戸を出大鳥筋を出水八月
に日向より山野を下總猿川渡京山若下宿邊カミ 屋宇をひく
- 六月廿二日小幡改坐入率まほく 三男称十方萬葉まつ 等を下アシテ 一
して元老入殿を却け江戸所濱川渡京山若下宿邊カミ 屋宇をひく
- 七月廿五日より九月朔日まで渡河の下於アシテ 木土作坐立大山又殊
著薩閑暇ありアシテ 八月那人主昇立奉率ヒタチ に十八才二世
- 九月祚國明祚社拂遠立あり
- 十月至坐済再達誠共五日近度アシテ
○今年あ玉橋を改め築世賤の見せを
が名あとあり——セキ 本達子なり

同二年 乙酉 七月宜

二月より圓向院にて招附吳彼の東附如本宴賀

○同月より後坐ちて招附大次山久安ちふら親世主一のみ年

月宴賀○に月よりゆ代ちふくに方作生源并才天お刀若林本

親世主并總足添田山正勤宴賀○五月、深戸川、瀧あり

○六月十五日山村季吟翁率八十方池のまこと山草をもふ草を石垣の築する
ほのすあり輝世玉へあはれ「花も田原郭云
をもあらわせ」○七月より圓向院にて添東靈山歎阿添抱宴賀

後世主よきまき

○七月奉法恩ちて東本國ち歎迦如本宴賀

○門永代ちて江戸日暮内作宴賀

○今幸作規宇庵諸生より年脩多一

信ふうげ年りとつむ澤公宣
信の事ふあらぬの文を署してつぶ

定四月上旬の日洛中洛外童男童女七八十に五六十より至るを御殿を備せ度拔
手をひくに弱一發波寧樂ハナメハモヒタツノ内一時ふのひすすくと法人
ねせきく妻子徒僕生をいふをもほなまをもく年脩を作規湯乃ハ被選莫吉
ふして難をうづき地もあ一凡年清の男女一日二三万金スダホ多金をうづく所

る

○七月廿六日官医ま田告丸率

長寿院と尾次附
東海と伊豆少林院主葬

○十一月十四日新嘗刻よりかし呉彼招附船治場のち、南か六町東あ
二町計りぬきあ、万ハナ所附燒火蟹立目已上刻火落る

○十二月某山靈光ち當年より移る今も當年小笠老寺故
といあり是因地あり

寶永二年丙戌

正月二日傷寒拂糞系玄駕車名希御号堂源林小左衛
鏡河拂因玄子ノサニ

○正月十四日秋子別祚因源田町大坂町よりおひして筋邊原附土多町
左祚因町大坂町石町通り小はる町波町大門をり長篠川町
鼎町波津町辺野大坂町薪材本町大坂町よりうら橋波津町望十五日
辰刻終波津町○正月十八日圓向院波津町おほく波唐二年太火火災失
せ一紫五十年忌吊法事あり○二月廿日夜亥刻波津町火
が火あかに町事あ二町波燒亡と

○二月十四日梨子の本元膳車戸田氏恭光尾三郎新郎清吉子
葬儀舞世只の林美子子かられまきうれ
金の手を

手を賣ひて

○二月十七日傷寒栗山濱奉車車久應
林源助
羽政院充ちふ葬

○六月元字令吹音あり足を空字報とりよ

○七月どう根深権現社廟の西市再興十月賤物高木公
りの國子板の所大坂町より○七月廿二日大要板大坂町公

○八月將時松林惇法圓因種の額金五八幡宮大坂町掲

○九月十九日亥ト刻大比辰大坂町○十一月九日医師薬生方菴車久應
祖母
の父之三田
松家某

○屋形船百艘小極大坂町○各用戸妙子
拾坐ふり

○十一月十六日己刻に谷作町大坂町より火に丁半波燒

○同月廿日夜子刻和泉町後大坂町後若町幸方東町
町葺屋町大坂町長翁川町大坂町武家方太幅二町長十
五町計大坂町燒亡

同 二年 丁亥

正月春流川端地秀重祐天陽再建ありす称院と云即命而死

- 施紗の日あり ○ 正月十九日申津刻渡町新田の町よりか火奉所の
橘舟才てあそり中の竹葉平天神の社を元小舟小舟を宣下附侍
○二月晦日俳人櫻草生角草 早七才 号室晋齊
二年後上行ち本草を
- 三月八日大火あり 既而保祿ふ記り モサホ 未詳 ○ 住棲朝然年虛アシタノハシナニコトナリ
蔬井圓向院坐定帳 ○ 五月廿二日東嶽山タカツグヤマ 新学院方翁僧於寂
- 七月二日十谷重義も詔書賜法界寂 在宿の日はまた田舎とりと
甲斐流宣学本名有之
- 八月朔日小石川高安マウケン 榛田よりを火船に又町也二年町程於燒毛
墨マツシタスル
- 九月廿七日儒師松浦文翠草 アキラマ
の園をてくじんを
六十尺方久默存菴立而
月へ齋廬 一中日頃
- 十月十三日俳人服部嵐雪草 五十尺大約止常檢さる本草を解世の句
日暮至本草字本草
一葉翁咄ひともちる風の上
- 十一月十六日連寺源里村昌陸草 六十九才
- 諸國報れ古停止あり
- 十一月廿四日より富士山の根キネ と頑カタマリ とには燒了天晴く要事地震
夥ハサカ とく空東白灰降りて雪の如く地を埋ハシム むゑあ頻オカキ つひみびく
あり自晝暗夜のよとく小休エカヒ て餘カタマリ 煙桃灯カクヂン をとりとせサニ日殊カタマリ とく
サニ日もより天晴エント て餘カタマリ 日を遡カウド て諸人安堵アンド と又サニ日サニ日
再び天暴カタマリ て餘カタマリ 雨聲カタマリ の如き寫カタマリ た地震あり是どり更度降
サニ日平常の如く此時カタマリ と本カタマリ て山を室永山ミタマツヤマ とつ世人へげほ嘆頌
を奏カタマリ 是す折煙草小豆えとて波音室山煙る例ハ延暦十九年三月廿四日より
四月十八日と今年のやく煙草貞親元年五月十日自煙るとなく
- 十一月廿八日俳人五寧宇草 ニ田小山
太宰まさよ幸
- 宝永五年 戊子 正月宜
- 正月元日大凶 ○ 宜正月二日武彦相撲 三河玉く妙勝

○二月地上ふ白色を生れ○二月秋元彦治完田彦助といふ人
民召入る那場^{アリスモト}集村場集井の回蹟久て處を失ひんと欲き
石標を立廢小碑を建る○七月御目集人山岡家編率^{ハナカオ}八十五
年頃ち地中廢竈^{アリスモト}子^{アリスモト}云^{ミサカ}○七月那人^{ミタガ}一品率^{ハナカオ}八十五
年周^{ムツ}家^{アリスモト}守^{アリスモト}高橋^{アリスモト}家^{アリスモト}後^{アリスモト}云^{ミサカ}

○五月十又稼^{ハタク}一めて通用始^ルあり徑一寸二分重一女文字^{アリスモト}小田原度^{アリスモト}の
匠^{アリスモト}林家房^{アリスモト}門^{アリスモト}人極^{アリスモト}也^{アリスモト}○深川の山門^{アリスモト}世^{アリスモト}地^{アリスモト}產^{アリスモト}也^{アリスモト}四元金銅^{アリスモト}之^{アリスモト}地^{アリスモト}荒^{アリスモト}る六神^{アリスモト}を造立

も今年とう始て深戸之新^{アリスモト}お安すも深川^{アリスモト}也^{アリスモト}今年^{アリスモト}山谷^{アリスモト}東深

寺^{アリスモト}宝坐室^{アリスモト}已谷春家守^{アリスモト}正徳二年^{アリスモト}也^{アリスモト}九月歲^{アリスモト}梁門^{アリスモト}まの心^{アリスモト}正徳四年^{アリスモト}也^{アリスモト}九月歲^{アリスモト}深川靈廟^{アリスモト}也^{アリスモト}

寺^{アリスモト}享保三年^{アリスモト}八月歲^{アリスモト}同前永代^{アリスモト}享保五年^{アリスモト}七月歲^{アリスモト}○多^{アリスモト}麻疹流^{アリスモト}

○十月廿一日算額^{アリスモト}の附閏引勑^{アリスモト}恭和率^{アリスモト}号^{アリスモト}自定閏流^{アリスモト}也^{アリスモト}牛込法輪^{アリスモト}也^{アリスモト}葬^{アリスモト}

○龜手原^{アリスモト}本化佛親世^{アリスモト}高冥帳

○十一月十五日深川八幡宮送嘗^{アリスモト}迎賓○十二月二日将野隨^{アリスモト}川佐
率^{アリスモト}十七才○十二月廿二日後後十代廉安^{アリスモト}率^{アリスモト}八十六

○十二月谷中歎^{アリスモト}度^{アリスモト}之^{アリスモト}の隠^{アリスモト}ある空^{アリスモト}也^{アリスモト}乃^{アリスモト}店^{アリスモト}不尚齒^{アリスモト}今^{アリスモト}

母^{アリスモト}勝^{アリスモト}邊^{アリスモト}事^{アリスモト}居^{アリスモト}百廿七才^{アリスモト}みて上^{アリスモト}度^{アリスモト}あり^{アリスモト}持^{アリスモト}み^{アリスモト}小^{アリスモト}より^{アリスモト}妙^{アリスモト}人^{アリスモト}派^{アリスモト}の
僕二人^{アリスモト}穿^{アリスモト}衣^{アリスモト}俗^{アリスモト}人^{アリスモト}素^{アリスモト}襷^{アリスモト}禮^{アリスモト}あて^{アリスモト}名^{アリスモト}舟^{アリスモト}也^{アリスモト}景^{アリスモト}慶^{アリスモト}春秋^{アリスモト}風^{アリスモト}而^{アリスモト}老^{アリスモト}聞^{アリスモト}芳^{アリスモト}日^{アリスモト}宜^{アリスモト}席^{アリスモト}の古^{アリスモト}宴^{アリスモト}あり^{アリスモト}幸^{アリスモト}唐^{アリスモト}本^{アリスモト}玉^{アリスモト}孫^{アリスモト}次^{アリスモト}生^{アリスモト}慶^{アリスモト}行^{アリスモト}天^{アリスモト}十年^{アリスモト}壬午^{アリスモト}小生^{アリスモト}是^{アリスモト}の熟^{アリスモト}切^{アリスモト}あ^{アリスモト}仕^{アリスモト}を^{アリスモト}歸^{アリスモト}て^{アリスモト}後^{アリスモト}使^{アリスモト}し^{アリスモト}唐^{アリスモト}本^{アリスモト}天^{アリスモト}至^{アリスモト}防^{アリスモト}蒙^{アリスモト}院^{アリスモト}を^{アリスモト}始^{アリスモト}も^{アリスモト}勝^{アリスモト}の法^{アリスモト}役^{アリスモト}を^{アリスモト}え^{アリスモト}ぐ^{アリスモト}九^{アリスモト}九^{アリスモト}方^{アリスモト}の時^{アリスモト}ぬ^{アリスモト}胡^{アリスモト}一^{アリスモト}室^{アリスモト}八^{アリスモト}年^{アリスモト}玉^{アリスモト}草^{アリスモト}因^{アリスモト}本^{アリスモト}幸^{アリスモト}店^{アリスモト}老^{アリスモト}の役^{アリスモト}十^{アリスモト}才^{アリスモト}也^{アリスモト}其^{アリスモト}のせ^{アリスモト}え^{アリスモト}ぞく^{アリスモト}も^{アリスモト}浮^{アリスモト}き^{アリスモト}す上方^{アリスモト}八十才^{アリスモト}也^{アリスモト}お^{アリスモト}八^{アリスモト}才^{アリスモト}也^{アリスモト}八^{アリスモト}才^{アリスモト}の人^{アリスモト}と^{アリスモト}書^{アリスモト}て^{アリスモト}余^{アリスモト}あり^{アリスモト}り

家^{アリスモト}承^{アリスモト}六年己丑

正月十又絶通用止○去年十月廿四日^{アリスモト}の後^{アリスモト}も晦^{アリスモト}し^{アリスモト}正月十一日
夜^{アリスモト}お^{アリスモト}め^{アリスモト}浮^{アリスモト}了^{アリスモト}折^{アリスモト}焚^{アリスモト}○二月漏夜^{アリスモト}湯^{アリスモト}運^{アリスモト}上^{アリスモト}脚免

○二月三日とう七月二日まで深川八幡宮冥帳

○六月宝字般通用す。一ある。

○七月より九月まで圓向院にて落成海花院迄不動堂寢帳

○九月多賀朝潮序にてゆきさる後英一様と号ひ多賀町

○十二月廿四日能人小澤源八卒源八町坊正なり

○後辺事店討話記松本善謙著

○後辺事店討話記松本善謙著

室永七年 庚寅 八月圓

二月上野清翁移病於康草药形移

○三月二つ宝銀傍改三種大本店石垣を築せしも活字

札協定三○湯ノ内波守寢創圓山本食義上人六月七日

延化九年九○喜圓向院にて移宅作如東昇將

○三月十九日角田川木母木母丸七百世ニ年忌大念佛圓向

拂拂小塙記不傳小塙元年

七百世五年五月

五月より六月まで水代ちふ旋て奥羽

宏城変服の御馳御馳朝朝の發發實實の親親世世又入又之之慶慶の不動堂

閑帳閑帳○二月より五月まで深川深川行寺行寺蔬包蔬包の阿阿波泡泡アビ

井波仲公軍陣軍陣のち弘弘か手手親親世世又二月月不動堂不動堂通通用用止

天安帳天安帳○二月乾金乾金三つ宝銀通用始始御年判通用止

○七月十一日渡海渡海剝立剝立のれ雲禪雲禪師寂寂

空彦空彦冥冥○九月廿一日せき口山門山門除就除就よりて諸人諸人姓姓以以

日は廿一丁同同ニテ同同まで廿口口丁目二丁目ニテ同同と改改る

○十月十日亥刻亥刻火車門火車門燒燒也也一本一本不十首

○十一月疏陳人來聘正使正使安里王子見見城城王子

○武隨筆武隨筆今今年年未未定定

太火あけ一時あるせり○十一月青山梅定院の雛縫を縫ひん
くせし時経持法蓮社來參縫的上人の愛下終女あり家富翁
ふうそく佛果を得て一縫て一面の縫を縫くまどり列く毛を
かづく縫を縫く解綻をゆるの因縁ともあらべと云ふと忍
つを愛覺て後側二面の縫わう上人亭うめのひをすここの
縫ふかくすか縫改むこと

○十二月十九日未下別作田小柳町へき真田か山中屋安とう
お火也あ風烈々々町石町八丁塔靈巖源海とみよ長平
立町幅二丈町もく七八町ふゆる翌日辰別終す

○第十七面坂七面大明神勤縫角くつる女はふをあ余の後
夏の告あつてなあふことを

卅年間記本

宝永中靈夏ふとてあ承取の内すまて石像の閻摩主江戸
金地院境内移す

○宝永中疫癪やくぱくもあく一に泊はの百姓衆ひとりすの妻等の毛の毛を
脱りぬはるきの市不賣りるる來ゆり一の疫癪の患をのま
とく後靈主よりの方もともまきり此時代近辺の童子弊を机で
窓けひとそ○塵場管小瀬摩芋の本日本より宝永年保
あり蒲団なり縫縫り來長保すくまく縫くらはなう事保
升年乙卯小石川若生至れふりうるまこと一に
毛草庵草考をあくせり○鼻紙袋との財無となり始る

○宝永中身若中納立實蔵は宝永丙午向の財富を
始めて月と花の如く人ふ見えぞたや宝の雪のほりと

○嘉永元年秋遠近名下の近戸里ふみを掃除の而下りて
有櫛ノ木の有側矢の山彦跡町至と麻葉木もあら羽町家代
軒を並べる。近戸村腰舟天満えどり東の方へ開いてあり

